

2019.9.15 年間第24主日

一匹の羊、一枚の銀貨、一人の息子

ルカによる福音書 15:1-32

(そのとき、) 徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。

あるいは、ドラクメ銀貨を十枚持っている女がいて、その一枚を無くしたとすれば、ともし火をつけ、家を掃き、見つけるまで念を入れて捜さないだろうか。そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つけましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、一人の罪人が悔い改めれば、神の天使たちの間に喜びがある。」

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話を

させた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物してくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。

「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死ん

でいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」

説教

散歩の途中で立ち話をしていたら「犬の気持ち」のはなしになりました。犬の気持ちがわかる？とわたしに聴いてきました。その方は飼い主初心者です、と自分のことを説明していましたが、犬の気持ちがわからないことに不安があったのかもしれませんが。わたしも犬の気持ちはわかりませんと答え、すぐにしまったと思い、でも犬には慰めてもらってます、と付け加えました。わたしは犬の気持ちがわからないけれど、犬はわたしの気持ちをわかっている、人間の方はわかってないけど、犬のほうはよくわかっている、と「犬の気持ち」の問いかけでこのことに気づきました。

神さまの気持ち、お考えというのは人にはよくわからない、でも反対に神さまのほうからすれば人間のことは、あなたやわたし一人ひとりのことはよくわかっている、だからその人その人に、時にあった慰めや諭し、あるいは戒めを与えてくださいます。

そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。15:5-16

そして、見つけたら、友達や近所の女たちを呼び集めて、『無くした銀貨を見つきましたから、一緒に喜んでください』と言うであろう。15:9

すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』」15:31-32

きょうの3つのたとえ話、一匹の羊、一枚の銀貨、一人の息子の結末は「一緒に喜んでください」が共通しています。でも放蕩息子の話は単純に喜ぼう、

ではなく入り組んでいます。羊や銀貨と違い、二人の息子がからむ話でそれなりの背景もあるので単純に喜ぼうというわけにはいかなかったようです。では、視点をかえて羊は見つからず、銀貨も探したけれど無かったという話だったらどうなるでしょう。喜ぶはなしにはなりませんから近所の人を呼んで「いっしょに悲しんでください」となるのでしょうか。

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。 ローマの信徒への手紙 12:15

パウロも薦めているように、やっぱりいっしょに泣くのでしょうか。

一人の息子のケースだとどうなるでしょう？ 弟が帰ってこなかったらどうなるでしょう。お父さんの、そして長男の気持ちはどうなるでしょう。泣くこともあるかもしれませんが、もともといないのだから特別に泣こうという気持ちにもならないかもしれません。

人間の気持ちは泣いたり笑ったりですが「神の気持ち」はどうなるのか。

大きな喜びが天にある。 15:7

神の天使たちの間に喜びがある。 15:10

これをさかさまにすると、大きな悲しみが天にあり、神の天使たちの間に悲しみがある、となります。だとすると弟のケースでも同じように天に悲しみがあるのでしょうか。

一匹の羊、一枚の銀貨、一人の息子が「戻ってくるか、こないか」このことが神さまの一大関心事だということが読み取れます。煎じ詰めれば、罪とは神から離れてしまうことです。神の似姿として造られたわたしたちが、神の被造物である世界のすべてが、神のもとに立ち返ることができますように。
